

原爆を歌うとららんと

中原 豊

一九九五年、広島と長崎に原爆が投下されてから五十年という節目の年にあたって、長崎市は「被爆50周年記念事業」と総称される三十三の事業を行った。その一つに記念歌の制作があった。

一般から歌詞を募集し最も優秀なものに長崎出身の作曲家大島ミチル氏が曲をつけるといのがその内容である。そうして出来上がった記念歌は、従来の「平和は長崎から」に代わって、毎年八月九日に開かれる平和式典の最後に歌われることになっていた。

私にその審査委員を務めるようにという依頼があったのは前年の一九九四年の秋だった。はじめは長崎市の出身ではないことを理由に辞退しようとした。しかし、訪ねて来た長崎市職員のK氏は、長崎大学に教員として勤めながら詩の研究をされており、三〇代という年代である（当時）ことが私を選んだ理由であり、長崎出身であることは関係がないと説明した。迷いはあったが、全世界に向けて、そして次の世代に向けての記念歌制作ということがコンセプトであるならば、自分が関わることも無駄ではないと思ひ、ひきうけることにしたのである。

歌詞の募集は八月から十一月にかけてであったから、すでに作品がぞくぞくと寄せられている最中だった。通し番号を付し名前を隠されたコピーを綴じた冊子がたちまち机の上に山をなした。

最終的に応募総数は一九四七点に達し、はじめから対象外と判断されて審査委員に送られなかったものを除いても、届けられた作品は一六〇〇を大きく超えていたと思う。それにひとつひとつ目を通していくのはかなり骨の折れる作業だった。中には高校の先生の指導でクラス全員が応募したというケースもあったが、応募数の多さは人々の関心の高さを表すものだから、それだけでもこの企画は半ば成功しているといえなくもない。しかしその内容や表現の多くは似たようなものであって、容易に優劣を決めることができないのである。初めは目を引くように思っけて付箋を貼った作品が、読み進めるうちに他の類似した作品の中に埋没してしまふということが繰り返された。

その過程で、半ば軽い気持ちで審査を引き受けた私の中でも、自分なりに新しい「原爆の歌」に求めるものがはっきりとした輪郭をとりはじめた。まずは「祈りの長崎」として定着したイメージを脱却したもの。そして、被害者意識に偏ることがないものということであった。祈りという姿勢は訴える力に乏しいとかねがね思っていたし、加害者を責める（それさえも「祈り」の中では曖昧にされているといえるが）だけの発想では真にグローバルな視点には至ることができないと考えたからである。第二次世界大戦において日本はまぎれもなく加害責任を持っており、長崎に原爆が落とされたのも、長崎港が主要な軍港の一つであるとともに兵器工場がこの地にあったためだった。もし当時の日本に十分な技術力と経済力があつたとしたら原爆を製造し使用していたのではないか。それまでの「長崎」というイメージを相対化するような内容を持ったもの、それがその時の私が求めた歌詞だった。

しかし、そういう私の要求を満たす応募作はなかなか見つからなかった。このままでは網膜に「長崎」「平和」「生命」「愛」といった文字が焼き付いてしまうのではないかと思われた頃、「私はあなただったかもしれない」に行きあたったのである。一九九六年三月に長崎市原爆被爆対策部から発行された『長崎原爆被爆50年史』から引用してみよう。

この国に この時代に／生まれてきた偶然／髪の色 肌の色／
選べない運命／私はあなただったかもしれない／だから支えた
い／あなたの苦しみも哀しみも／あなたは私だったかもしれない
い／だから守りたい／あなたの幸せと微笑みを

凍えずに 飢えもせず／育ってきた感謝を／平和へと続く道／
切り開き示そう／私はあなただったかもしれない／だから信じ
たい／想いがいつの日か届くこと／あなたは私だったかもしれない
ない／だから伝えたい／生命の輝きと尊さを

私はあなただったかもしれない／だから支えたい／あなたの苦
しみも哀しみも／あなたは私だったかもしれない／だから守り
たい／あなたの幸せと微笑みを

使われている語彙は他とさほど変わらないものの、この歌詞の内
容はその時の私にとってきわめて鮮烈だった。そして読後に様々
な思いに誘われた。長崎に落とされた原爆が当初の予定通り小倉
に落とされていたら、当時小倉に近い下関に暮らしていた私の母も

放射能の影響を免れなかっただろうし、その子どもとして生まれ
ることになる私の人生も異なったものになっていたかもしれない。
い。そのような個人的なことから、政治的、民族的、宗教的、さ
まざまな理由から立場を異にする人間同士が、現在も世界のあち
こちで対立を続けていることを思わずにはいらなかった。この
歌詞にはそうした対立を超えようとする意志が示されていて、単
純な平和への祈りにはない力を持っていると思えた。

その鮮烈な印象は応募作の最後の一篇まで読み終えても変わら
なかった。第一次選考として審査委員各自が五篇程度を選んでお
くことになっていたので、印象に残った他の数編とともに、私は
この歌詞を選考会で推薦することにした。

最初の選考会は阪神淡路大震災の当日の一九九五年一月十七日
であった。私以外の審査委員は詩人の山田かん、長崎新聞社編集
アドバイザー宮川密義、脚本・演出家の津田桂子、児童文学作家
村山早紀の諸氏で、ご自身が被爆者である山田氏をはじめとして
長崎にそれぞれゆかりのある方々であり、年齢も六十代から二十
代までバランスを配慮して構成されていた。その席で各々が選考
した歌詞を紹介し選考理由を述べていったが、挙げられた作品は
様々だった。それまで歌われていた「平和を長崎に」が歌人島内
八郎の手になる七五調のものだったためか、「いのち、かがやけ
ー長崎からのメッセージ」などの現代的な感覚をもった作品が多
くを占めたが、空に浮かぶ金魚という幻想的なイメージに核時代
の不安を表現した「金魚」などもあった。「私はあなただったか
もしれない」を推したのは私一人だった。

そんな中で次第に多くの支持を集めていったのが「千羽鶴」だ

った。

平和への誓い新たに／緋の色の鶴を折る／清らかな心のままに
／白い鶴折りたたみ／わきあがる熱き思いを／赤色の鶴に折る

平和への祈りは深く／紫の鶴を折る／野の果てに埋もれし人に
／黄色い鶴折りたたみ／水底に沈みし人に／青色の鶴を折る

平和への願いをこめて／緑なる鶴を折る／地球より重い生命よ
／藍の鶴折りたたみ／未来への希望と夢を／桃色の鶴に折る

未来への希望と夢を／虹色の鶴に折る

この作品に私はさしたる印象を持っていなかったし、改めて読んでみてもそれは変わらなかった。古風な印象はあるが措辞が整ってはいたし、全体が鶴を折るというイメージで統一されていて、確かにわかりやすい歌詞だった。それでも、文語調の〈野の果てに倒れし〉〈水底に沈みし〉は被爆者よりも戦死者を想像させたし、〈地球より重い生命〉という表現の陳腐さが気になった。なによりも「祈りの長崎」のイメージをほとんど離れていないことが私には不満だった。

次の選考会は同じ月の三十一日で、そこから作曲を担当することになって大島ミチル氏も参加した。その日に最優秀作を決定し、記者発表することになっていった。

決定的な作品がないというのが審査委員の一致した意見だった

が、大勢は次第に「千羽鶴」に傾いていった。私は最後まで「私にはあなただったかもしれない」を推したが、大島氏の〈肌の色〉をあげつらっている点が国際感覚に欠けるという評価を聞いて断念した。その批判は的はずれなものと思ったが、大島氏が胸中で「千羽鶴」を選んでいることが明らかであり、最終的には作曲者の選択に任せるしかないように思えたからである。

最優秀作が決定した時点で伏せられていた作者の名前が明らかになった。「千羽鶴」の作者は千葉県に住む初老の男性であった。女性の作者を想像していた審査員一同は軽い驚きの声をあげた。そして、第一次選考を通過した二十あまりの作品が全て長崎以外の在住者の作品だった。それもまた意外なように見えて実は意外ではないのだろう。「長崎」のイメージはもはや長崎を離れたところで成立していることを示しているともいえるからだ。

五月十二日、授賞式と記念歌のお披露目が行われた。招かれて挨拶に立った「千羽鶴」の作者は、気負った言葉もなく、前年の夏の甲子園で活躍した高校の名前を挙げながら淡々と長崎への親しみを語った。私の隣でそれを聞いていた二十代の審査委員が微笑みながら大きくうなずいた。そこにはそれぞれの私の「長崎」があり、互いに共鳴しあっているようだった。そこにある、いろいろな差異を全て飲み込んでしまうかのような「長崎」のイメージに、私はどうしても同化できなかった。かといって、それに対応できるような明確な何かを持っているというわけではなかった。

やがて、作曲者の大島氏の母校である純心女子高校の合唱団がステージに上がり、完成された「千羽鶴」を歌った。私はそこで

ある種の新鮮な感覚を覚えた。メロディーはおおらかで明るく、それでいて儀式にふさわしい品格のようなものも兼ね備えている。私は少し安堵した。最近になって、第一線で活躍する人物を紹介する「在る」と題された「朝日新聞」の特集記事が大島ミチル氏を取り上げ、「千羽鶴」のことにふれているのを読んだ。氏の母は被爆者であり、母校では前の記念歌である「平和は長崎から」を歌っていたという。そして「千羽鶴」は、ふだんは依頼に応ずるだけで自分のメッセージを作品に託すことのない氏が、仕事のため東京に住みながらめつたに帰ることのない故郷のために書いた、特別な意味を持った曲だということなのだ。そうした思いの深さは確かにあのメロディーや編曲に表れていたように思う。そこにも大島氏の遠きにありて思う「私の長崎」の力が働いていた。そうして記念歌は完成したのである。

その年の八月九日、私は平和祈念式典に初めて参列した。式典で歌われる「千羽鶴」を見届けたいという思いであった。金属探知器をくぐって参列者ために設置された巨大なテントに近づくと、奉安箱や献花台・献水台が置かれた場所の背後に、大きな折り鶴をあしらったモニュメントが設置されているのが目に入った。千羽鶴と違って拡大された折り鶴は鋭角が多くてデザインが難しいと、長崎市職員のK氏が語っていたことをふと思い出した。筋骨たくましい平和祈念像の下の折り鶴の鋭角はどこか戦闘的で落ち着かない感じを与えた。

テントの中にはわずかに空席が残っていたが、私は影をはずれた最後列に立った。式典は粛々と進行し、私はたちまち汗だくなかった。数ヶ月前に断裂した靱帯をつなぐ手術を受けた足首も痛み始めた。連絡をもらえれば席を用意するというK氏の言葉を思い出しながら、半ば意地になつて最後までそこに立っていた。しよせん「私の長崎」の外に在るだという拗ねたような気持もあったが、やはりそこが自分にふさわしい位置だと思つたからである。考えてみれば、私は原爆をめぐる問題を長崎だけに押しつけようとしていた。祈りはひとりひとりの私の「長崎」の表現なのであり、それを邪魔する権利は誰も持たない。

いよいよ「千羽鶴」が歌われる時が来た。被爆者をはじめとする地元の人々がそれを聴いてどんな感想を抱いたかは残念ながらわからない。少なくとも私には、式典の最後を飾る曲として悪くないと感じられた。そして、それから七年が過ぎた今日まで、「千羽鶴」は歌い継がれてきている。

結局のところ、自分にとつての「原爆の歌」は自分の声で歌うしかない。そのためには、一九九五年八月九日の日差し熱さや、原爆被爆とは何の関係もない手術後の傷の痛みから出発するより他はないのである。長崎に住み始めて八年間をぼんやりと過ごしていた私は、その時になつてようやく、そのような当たり前の結論に達したのであった。